【374】

氏　名（本籍）	内田　康（静岡県）（うちだ　やすし）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2189　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	「三種神器」神話の生成と『平家物語』

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮　本　陽一郎
副　査	筑波大学教授	文学博士	今　井　雅　晴
副　査	筑波大学教授	文学博士	伊　藤　　益

論文の内容の要旨

本論文は，中世以降にひろまっていく「三種神器」をめぐる観念が生成される際に，「神器」にたいする理解が「物語」という形をとってどのように流布したかを跡づけ，さらに，必ずしも単一的な把握には収斂しない中世の「三種神器」解釈の多元性を浮き彫りにし，もって，いかに天皇の権威保証の役割を担う「神話」言説が生成されたかを，主に『平家物語』の分析をかいして追究したものである。本論文の構成は以下のとおり。

序　章
第一部
　第一章　『平家物語』〈宝剣説話〉の《範囲》
　第二章　〈「宝剣」=「草薙剣」〉という「物語」
　第三章　〈「三種神器」神話〉の生成と『平家物語』
　第四章　もう一つの〈「宝剣」説話〉
第二部
　第五章　流動する〈宝剣説話〉
　第六章　『太平記』〈宝剣説話〉の位相
　第七章　『神皇正統記』と「神器」論
　第八章　〈宝剣説話〉としての「剣巻」
結　章
附　録
参考文献

本論文は，二部構成になっており，第一部（第一, 二, 三, 四章）では現存する中世の「三種神器」諸説の

うちでも比較的早い時期にある程度まとめられたとされる『平家物語』の「剣」の章段（宝剣説話）を対象に，そこに描かれた「三種神器」神話の焦点箇所を抽出し，第二部（第五, 六, 七, 八章）では，主として南北朝時代以降，『平家物語』を意識しつつそこから逸脱・変容していった多様な「神話」群をとりあげ，その拡散の様相を検討している。

第一章では，『平家物語』の厖大な異種本を考慮しつつ，その代表的な八本に『剣巻』をくわえ，それぞれの構成要素の差異に注目しつつ，『平家物語』の〈宝剣説話〉の基本的形態の抽出をこころみている。その結果，どの異種本にも例外なく，「神代」以来の「草薙剣」が内裏におかれた「宝剣」であったということから語りおこされていること，そのため熱田社に奉斎されているはずの〈神代以来の霊剣〉と，水没した〈内裏の宝剣〉とのあいだにある本来的断絶を説話整理の段階に亀裂として抱え込み，諸本生成の過程でその叙述内容が多様に分化したこと，とりわけ，いわゆる「読み本」系と「語り」系とで，沈んだ剣が崇神天皇の時代に新鋳されたものか否かが異なること，これらの結果は従来の指摘のような「本剣」の現存を天皇の権威の存続と結びつけているためではなく，この説話自体が内包した亀裂を，各異種本が独自の方法で埋め合わせようとしたためであることを明かしている。

第二章では，「神話」の根拠となった『日本書紀』や『古語拾遺』以降，「草薙剣」はあくまでも熱田社奉斎の剣であると認識されていた一方，天皇の「護御璽」としての内裏の「宝剣」も，院政期までには〈神代以来の霊剣〉であるとされるようになっていたこと，また，こうした経緯により，「宝剣」の水没は，当時の宮廷社会で，『日本書紀』や『先代旧事本紀』に記された「神代」以来の「三種寶物」の喪失と理解されたが，それが内裏におかれるようになった具体的過程については解釈上の混乱が生じたこと，さらに，鎌倉時代末期までに成立していた可能性のある延慶本『平家物語』では，一方で新鋳された剣の霊威を強調する他の『平家物語』諸本と同様に，「宝剣」喪失の意味を重大視しつつも，他方では王権の危機を武家将軍の登場によって乗り越えようという，一見すると矛盾した叙述態度がしめされているが，これは当時の時代認識の相克にたいして一つの決着をつけるものとしている。

第三章では，天皇の正統性を「三種神器」の所持にもとめようという，古代から治承・寿永の内乱にいたるまではみられなかった言説が，『平家物語』諸本を通して認められることを確認し，こうした観念が『平家物語』諸本の生成の過程と軌を一にして展開した可能性を指摘している。また，そうした事態があるにもかかわらず，「三種神器」神話の焦点は，のちにみられるように，伊勢や熱田に祀られた神体を「神器」の〈正體〉と捉え現実の王権を宣揚する態度とはことなり，あくまでも天皇のレガリア（王権の標章）の喪失を語ることにその主眼がすえられていたという。

第四章では，伊勢神宮から奉られた剣が「宝剣」水没後にスペアにされたという一件が，『源平盛衰記』において独自の「神話」として語られていることに注目し，そこに他の『平家物語』諸本とはことなる『源平盛衰記』の状況超克の指向性が存在したことを，『太平記』と対比しつつ論じている。

第五章では，『平家物語』（宝剣説話）の受容・変容の議論として，主に『神道雑々集』『寶釼御事』『和州布留大明神御縁起』を分析対象として，『平家物語』の叙述が「物語」の枠を離れ既成事実化し，多様に流動化する諸相を跡づけている。

第六章では，卜部兼員の語る「宝剣」由来譚を先行研究をてがかりとして分析し，「宝剣」＝「草薙剣」だとする『平家物語』との共通要素，さらに剣を布留社の「十握剣」と重ねるという差異を指摘し，『太平記』諸本生成における「草薙剣」解釈がより複雑化していく様相を検討している。

第七章では，親房の「神器」観がどのようなものであったかを，『平家物語』のみならず虎関師錬や慈遍の著述，また「伊勢神道」関係の著作類と対比しつつ論じ，親房が『神皇正統記』延元初稿本までの段階では，虎関や慈遍同様，伊勢や熱田に奉斎されている「神器」の＜正體＞の存在により多く関心を向けていたが，興国修訂本の段階になって，南朝が保持するレガリアとして「神器」の意義を強調するように変化した

可能性のあることを指摘している。

第八章では，「物語」言説における「三種神器」説のゆくえを，『平家物語剣巻』『平家物語補闕剣巻』という二種の「剣巻」にそくして論述し，『平家物語』は天皇のレガリアが「神代」伝来の宝器であるという神話の流通に多大な貢献をしたが，その神話は「神代」と現実との断層によってたえず不安定な情況にさらされ，新たな「物語」を生み出していったという。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，中世日本紀と呼ばれる中世の『日本書紀』注釈及び同書に仮託した説話生成という学問と文学の両者に跨る領域のなかで，その核となる宝剣説話がどのような展開・変容をとげたのかを追究した労作である。本論文の分析・解釈・整理の作業を通して，従来個別的であった先行研究に通史的意味と見通しが与えられ，宝剣説話の全体像が明らかにされた。これが本論文の第一の成果である。

その作業の副次的成果として，それまで孤立的，散在的に分布していた各種中世日本紀関係資料が互いにどのような位置を占めているのかが系統的に整理されることとなった。本論文が文学研究領域で評価されるべき第二の成果である。

さらに本論文の価値は文学研究領域にとどまらない。本論文は宝剣説話の展開・変容を扱いながら，それが必然的に王権の象徴となる「三種神器」に関する説話生成へと拡大・深化していった。それによって三種の神器と結びつく王権（天皇制）の歴史あるいは中世天皇論が語られることになり，文学を越えた歴史学（思想史学）の課題ともいうべき中世天皇史の一貫した記述をもたらすことになった。その成果は歴史学（思想史学）の領域にも寄与する点が大きい。

以上の評価は本論文が文学と歴史学の超領域的研究を指向していたことを明らかにしており，本論文の対象となる宝剣説話が既存の領域研究を超える可能性を持つことを示唆している点でも大いに評価できるものである。

しかし本論文の限界は，宝剣説話の追究を中世日本紀という領域の内部にとどめたために，その説話の展開・変容が実は中世王権の危機と密接に結びつくところにまで視野が及んでいない。中世王権の危機は『平家物語』『太平記』といった軍記物語の生成と深くかかわっている。宝剣説話の研究は，それがまさに中世天皇論と深く結びつくところからすれば，王権の危機に対抗した軍記物語の生成という仮説を検証する可能性を秘めているといえる。したがって本論文の視野がそこにまで及ばなかったことが惜しまれる。

ただしその自己限定が本論文の価値を損ねるということはなく，このままでも十分に学界に寄与する労作となっている。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。